ある地方都市の郊外、賑わいも無いのに人の気配だけはあるような一区画。私は目的地を目指して歩いていた。

「三つ目の交差点を右に曲がり、その先は――――突き当りの丁字路を左？」

こんな場所に来る気は無かったのに、と心の中で舌打ちして、スマートフォンから視線を戻す。

既に大通りから外れた脇道。人の気配を感じることは少なくなったが、通り過ぎた喫茶店を窓越しに覗いた時は、半分ほど席が埋まっていた。

「気味が悪いわ」

すれ違う人間はいない。電柱があり、ごみ箱があり、コンクリートの壁で民家は囲われている。それが、映画のセットのように配置されている物の様に思えて、ツクリモノ感を醸(かも)していた。

「突き当りを左で、後は……道なりに進んで三つ目の電柱がある場所？」

この案内もそうだ。まるでゲームの進行のように記号的な目印を告げ続ける。

私は、この言い知れぬ不快感を早足に変換した。

「ここよね」

三つ目の電柱がある場所の後ろに古臭い店があった。古民家風〇〇と最近は聞くけれども、これはその類ではないだろう。正しく古民家だ。

ショーウィンドウのような役目をはたしているであろうガラス戸が道に面して存在するが、それは外から木製の格子が取り付けられ、その格子とガラスの向こうに並ぶ人形や置時計、刀剣などが、まるで捕まった犯罪者かのように思えた。

「古美術商、タカ、シシの……なにこれ？」

格子の隣の柱には看板が掛けられているが、筆文字で書かれた店名は、その読み方が想像できない。

本当にここで探している場所があっているのかという不安が顔を見せるが、その思いはすぐに消え去った。

「ようこそ、鷹獅子（ようじし）の塒（ねぐら）。グリフィンズネストへ」

ガラリと音を立て、ガラス戸と看板を挟んで反対側にあった引き戸が開かれる。そこから白い頭がヌッと現われ、店名を唱えたのだ。

「どうぞ中へ」